

TALK「過去を視る 過去を想う」

出演：みはら かつお（美術家）、伊東 卓（写真家）

聞き手：高倉 悠樹



伊東

（壁に飾っている過去の作品、現在の作品を見ながら）みはらさんの2点の作品は同じ地図を題材にしているが、まったく違う技法だと思う。その辺の話を伺いたい。

みはら

20代は悩みながら制作をしていた。

1995年に阪神淡路大震災があり、大変なことが起きているにもかかわらず、自分の日常の変わらなさに違和感があった。

自分がその場所にいなくても身近に感じることはできないか、との思いから地図を使った制作へと向かった。

自分が何者かわからずにふわふわした状態に焦りを感じていた。

そんな想いもあり地にべたっと足をつける感覚、道路ごとにはっきりと色分けしてベタ塗りでの制作をしていた。

しかし、東日本大震災を機に自分の作品に違和感を覚える。

地面の揺れを表現しないとだめだ感じる。

二つの震災を機に地面と人間の付き合い方を考えるようになり、試行錯誤を経て現在の点描のスタイルになる。

もとを辿れば子供のころに経験した宮城県沖地震の怖さの記憶があり、繋がっていると思う。

やはり制作と震災は切り離せない。

高倉

伊東さんも繋がっている感覚はあるか？

伊東

自分も宮城県沖地震の記憶はある。

しかしけっこう曖昧で揺れた後の自分の日常のことは憶えてはいない。
ただ強烈な揺れの記憶は今でもある。
しかし自分の過去を無理に繋げなくてもいいのではないか。
東日本大震災の時には数日後から沿岸部の写真を撮りだした。
あの時は写真を撮らないという選択肢もあったが、自分は撮る方を選んだ。
10年が過ぎたが自分からその時の写真を発表するつもりはない。
まだ整理がついてはいないと思う。

みはら

当時制作はできなかったが、震災から10年後くらいしたなら個展を開催したいと漠然と思っていた。

高倉

伊東さんの個展によせての文章で廃墟を身の内に宿しているというのがあるが。

伊東

震災の当時の風景は忘れられない。
身体に入り込んでいるように感じている。
結局人間の造るものは廃墟へむかうのではないか。
その先に自然があるように思う。

●文章について

高倉

二人とも作品と平行して文章をしっかりと書く印象だが、作品と文章の関係性について聞きたい。



みはら

20代からノートを持ち歩いてメモを取るようになっていたが、震災以降毎年3月11日に寄せて文章を書いていた。

それを繋げるかたちでひとつの長いテキストになった。

どちらかといえば、自分を励ますつもり文章だった。

しかし昔の貞観地震のような千年に一度の震災を経験し、またコロナ禍の中にいる私たちは、のちの世代に文章や作品で伝える役割があると考えようになった。

未来の人達に過去を見てもらいたいと願うなら、自分たちも過去を見なければならぬ。

そんな思いから「千年景」というタイトルにした。

コロナの影響で展示をするのが困難な時にSARPの定点観測 (<https://sarp-sendai.com/special/定点観測まとめ/>) というグループ展があった。

自分にとってテキストとしてまとめるいいタイミングだったので作品といっしょに出展した。

高倉

みはらさんは千年という大きなスパンで過去を見ているように思う。

伊東さんは写真を補完する形で、文章で過去に触れていると感じるが、どのように捉えているのか。

伊東

写真とは過去。

写真と文章の関係は危ういもの。

以前ははっきりと分けていて写真に言葉の入る余地がなかった。

展示でもキャプションとして入れることはしなかった。

「光の穴」シリーズから写真だけでは回収しきれないものがあるのではないか、と感じるようになった。

自分の写真と文章の関係の一線をちょっとだけ超えて、そこで何が見えるかに興味があった。

高倉

作品と言葉の関係は確かに危うい。

言葉の重力が強くて、自由に想像力が羽ばたくことができないことがある。

作家は常にそのジレンマを抱えているのだと思う。

伊東

言葉による解釈の誤解があってもいい。

それをも引き受けていかなくてもいけないのではないか。

みはら

文章があると作品の賛否の幅が大きくなる。

そこに答えがあるわけではないが、入りやすい人もいる。

個展の際は作品と一緒にテキストを壁に貼っていた。

配るつもりではなかったが欲しいという人がいて急遽数部用意した。

そうしたら持ち帰る人が多くて次々に補充していった。

文章を熱心に読む人が以外と多かった。

伊東

僕も同じような経験をした。

文章による誤解も含めて、言葉の大事さは感じる。

配信視聴者からのコメント

作品とタイトルの関係性に込めたものがテキストに反映されているのかな。期待して読むことが多いです。

●お互いの作品について

伊東

みはらさんの2003年の作品は立体感があり決して動きがないとは思わない。
千年景に比べると抽象性が強いと思う。

みはら

もともと散歩が趣味。
この辺赤っぼいな、青っぼいなあ、空気が軽いなあ、足取りかるいなと感じながら歩く。
僕の制作の基本は散歩。
いろんな時間軸に飛びながら地図上を散歩しながら制作していつている。

高倉

地図とその場所との往還になっているようだ。

みはら

地図から「もっとよく見る」と言われているような気がする。
コロナを機によけいに絵がどこにあるのが良いか、と考えるようになった。
美術館のような広い場所ではなく、家の中のような落ち着ける場所に飾られているのが一番良いのではないか。
日常に絵があるというのを考える。
そうなる と どんどん小さな作品になってきた。

高倉

みはらさんは伊東さんの作品はどう見ているか。

みはら

呼吸を感じる。撮影者の存在、その現場にいるということを強く感じる。
それと写真に映っていないところ、暗闇の奥がどうなっているのか、などを感じる。
写真を見る自分がいて、撮影者の伊東さんがいて、そしてかつて穴を掘った人たちがいて、
もっと前の穴のない時代を想像する。
時代の地層みたいなものを感じる。

伊東

写真は写らないもの。
写っているつもりでも圧倒的に写ってない風景がある。
それを想像するのが写真の役目ではないか。

高倉

音が聞こえる。空洞の中で歩く音や水音などを感じる。

みはら

手彫りの音がまだ鳴り響いているかのよう。
その時代の音、汗など重層的だ。

伊東

自分は何を撮っているのか。
最初は穴そのものの存在。それから光へ、そして闇へと対象が変わってきているように感じている。
今は時間を撮っているように感じる。

高倉

その時間とは過去が積み重なっている地層みたいなものか。



伊東

そうかもしれない。
時間は地層のように堆積するものなのか、それとも全然違うベクトルで成り立っているのか。過去、現在、未来という直線的なものではないと思う。
僕が写真で撮りたいのは一瞬ではない。

配信視聴者からのコメント

みはらさんの絵には都市が衰退して最後は植物に埋まっていく、そんな千年後のイメージがある。

みはら

描いていると遡っていく感覚があるが、ふっと未来を描いているのではないかと思う時がある。

高倉

お二人は現在という平面的な空間ではなく、過去、未来を含めて広い空間で制作して、その中で遊んでいるように感じる。

みはら

世の中の生き辛さから抜け出す想像力が必要。
それを受け止めるのがファンタジーのような世界ではないか。
想像力の世界で広く受け止めるのが大事になってきていると思う。

高倉

しかしそれは決して現在を蔑ろにしているのではなく、今という時をも引き受けての広さなのではないか。

配信視聴者からのコメント

みはらさんの絵が仮面とたてがみに、伊東さんの写真が顔に見えてきた。

●土偶のこと



みはら

もともと縄文好きではあったが震災から地図の絵までの間に縄文から学んだほうが良いのではないかなと思うようになり土器を造るようになった。

地図は地面を描いていて、土器は直接土に触れる。この関係性にじっくりきた。

ただ土偶を作ることにはためらいがあった。そこには怖さがあったから。

しかしコロナのような得体のしれないものが近づいてくる不安の中で土偶を作ることを決める。

ただ土偶が何なのかは解らないところが多く、だからこそ楽しい。

もしかしたら土偶とは祈りなのかもしれない。自分なりの解釈ができるのがいい。

土偶の腹の部分には顔が描かれていると思う。

腹が立つとか胸が痛いなど心や身体に関する言葉など、当時存在していたのか解らないが、土偶を見ていると腑に落ちるようになる。

そんなことを想像するとロマンを感じる。

もしかすると当時の子供の玩具だったかもしれなくて、今の子供の人形にも通じるのかもしれない。

念のようなものを感じいろいろ想像するとワクワクする。

最初は作りながら怖さも感じたが、アトリエの作業机に置いておく自分の軸のようなものとなり、ありがたい存在に思えてくる。

土偶制作時は土から試されているというプレッシャーを常に感じながら、「祈り」という主題に正面から向き合うことになる。

人には祈りが必要なのだろうか？それとも祈られる側として求めているのではないかな？などいつも「怖さ」を感じている。

●怖さとは

伊東

怖さとは畏れということだろうか？

みはら

土偶にたいする畏れというよりも土への畏れかもしれない。
霊界や魔界への橋渡しの存在にも思えてくるのでその恐さかもしれない。
今よりもシンプルな時代にこれが作られていたということは、生きるうえで大事なことが土偶に含まれているのではないか。
震災やコロナ禍でよけいにそんなことを感じるようになった。

高倉

土偶の背景はよくわからないが、存在のインパクトはすごい。

伊東

みはらさんのお話を聞いていて、改めて畏れというものの大事さを思う。
穴の中は常に恐さがあり何が起きるかわからないが、その気持ちは抱いていきたい。
きっと震災の光景が忘れられないから。
それを自分に課していきたい。

高倉

みはらさんは以前「自分は恐いから作る」と仰っていたが、その辺のことを伺いたい。

みはら

絵のような美の裏側には恐さや哀しさがあるのではないか。
美の反対側には哀しさや恐さが潜んでいるのかもしれない。
恐さを感じるのは美に出会うチャンスかもしれない。

配信視聴者からのコメント

「こわい」ということばをお聞きして、なんだかふっと肩の力が抜ける感覚になってます

高倉

伊東さんの作品を見ると複雑なものを感じる。
光とはポジティブなだけでなくもっと複雑なものであり、奥には哀しみがあるのではないか。



伊東

「光の穴」というタイトルはそんな複雑なものを想像できればと思っている。

高倉

テキストで影が実体ではないか、というのがある。

モノクロとカラーでは強調されているところが少しずつ移っているように感じる。

伊東

穴は日常とは異なる世界が広がっている。

そこは闇が実体だと強く感じる。

自分はそこに足を踏み入れている。

モノクロでは闇と光に強調されていたが今はその先に興味がある。